

# 博士論文（要約）

## 論文題目

宗教教団の改革運動に関する歴史社会学的研究  
——真宗大谷派の事例分析

氏 名 宮部 峻

## 目次

第1章 本研究の問題意識.....	1
1 「浄土真宗はどこにいるのか」 .....	1
1.1 本研究の目的——浄土真宗の歴史を問うこと .....	1
1.2 「プロテスタント的想像」と浄土真宗.....	4
2 真宗大谷派の歴史.....	7
2.1 浄土真宗の時代状況.....	7
2.2 真宗教団と改革運動の歴史.....	7
3 本研究の分析対象と分析枠組み.....	8
3.1 分析対象.....	8
3.2 分析枠組み.....	9
4 分析の方法・使用するデータや資料.....	10
5 本研究の構成.....	11
第2章 分析枠組みと事例の概要.....	13
1 世俗化論の動向.....	14
1.1 「聖なるものの回帰」と「分化説としての世俗化論」 .....	15
1.2 組織と社会とのコンフリクト.....	16
2 既成仏教教団の構造.....	17
2.1 教団ライフサイクル論の意義と課題.....	17
2.2 教学と組織の関係——「ゼクテ論文」の意義と課題.....	19
3 信仰共同体としての教団と行政組織としての教団.....	21
3.1 行政組織としての教団の成立.....	21
3.2 総力戦による合理化と戦後の組織改革.....	22
4 信仰の近代化と組織の近代化のコンフリクト.....	24
4.1 制度ロジックへの注目.....	24
4.2 信仰の近代化のロジックと組織の近代化のロジック.....	26
5 改革派の概要と先行研究の問題点.....	27
5.1 清沢満之と精神主義の波及.....	27
5.2 清沢満之中心史観とその問題点.....	28
5.3 行政の改革運動としての近代教学.....	30
6 本研究の分析課題.....	31
第3章 「宗教」と「反宗教」の近代.....	32
1 「社会の発見」と浄土真宗.....	33
1.1 1920年代から1930年代の社会空間と近代的な浄土真宗.....	33
1.2 教団内での矛盾の発見とマルクス主義による批判への応答.....	34
2 マルクス主義と「反宗教」 .....	35
2.1 「反宗教」運動の概要.....	35
2.2 「マルクス主義と宗教」論争——階級意識と教団批判.....	36
2.3 マルクス主義と宗教教団の相容れなさ .....	37
4 教団による「反宗教」への応答.....	39

4.1	教団体制の見直し——組織次元での反省.....	39
4.2	「内奥」に訴えかける宗教——信仰次元での反省.....	41
5	「宗教」と「反宗教」の近代.....	42
第4章	戦争と改革派の動員.....	44
1	総力戦体制と教学.....	46
1.1	行政組織における教学.....	46
1.2	総力戦体制論と教学の再編成.....	46
2	戦争を肯定する教学の形成.....	47
2.1	暁烏敏と日本主義的言説——暁烏敏の信仰遍歴.....	47
2.2	制度に囚われない柔軟な教学の解釈.....	48
3	教学上の対立.....	49
3.1	「異端」としての教学.....	49
3.2	「異安心」事件.....	49
4	組織の合理化と「異端」の動員.....	50
4.1	教団組織の改革と合理化.....	50
4.2	「時代相応の教学」に向けた教学の再編成.....	51
4.3	教団改革の象徴としての「異端」.....	52
5	組織の合理化が戦後にもたらしたもの.....	53
第5章	封建遺制批判と宗教改革運動.....	56
1	真人社の結成と信仰の近代化.....	57
1.1	真人社の概要.....	57
1.2	近代教学者・安田理深.....	59
2	真宗大谷派を取り巻く時代状況.....	60
2.1	封建遺制批判と真宗大谷派.....	60
2.2	「マルクス主義と宗教」再び.....	60
3	真人社の課題と目的.....	62
3.1	教団内部での革新運動の挫折と真人社の課題.....	62
3.2	信仰と制度改革との結びつきの不在.....	65
4	信仰の純粋化と純粋な信仰共同体の追求.....	66
4.1	「体験主義」の限界.....	66
4.2	信仰に基づく教団論の構想へ.....	67
5	信仰運動と行政運動のはざままで.....	68
第6章	大衆の時代と浄土真宗.....	70
1	戦争がもたらした人的資源と制度的資源.....	72
1.1	敗戦後の教団の危機と改革派の進出.....	72
1.2	人的連続性と研究機関による「異端の正統化」.....	74
2	伝統的基盤の衰退と新興宗教の台頭.....	75
2.1	真宗教団の基盤と都市化・産業化への対応.....	75
2.2	農村を啓蒙する浄土真宗理解.....	76
2.3	観念的な新興宗教・新宗教批判.....	78

3	「信仰」と「行政」との距離.....	80
3.1	同朋会運動の特徴.....	80
3.2	行政カリスマと教学カリスマ.....	81
3.3	「教団」とは何か——普遍性の追求と教学.....	82
4	同朋会運動の課題.....	83
4.1	新興宗教・新宗教の台頭と「大衆の時代」.....	83
4.2	観念的な新興宗教批判の問題.....	84
4.3	運動を観察する宗教社会学者.....	86
4.4	エリート主導の運動の課題.....	87
5	改革と対立.....	88
第7章	教団改革の帰結.....	89
1	宗教法と教団改革.....	90
1.1	「開申事件」と「三位一体」としての法主.....	90
1.2	宗教をめぐる法の変化.....	92
1.3	争いと内部規則.....	93
2	法主制への異議と宗憲.....	94
2.1	法主と管長の別.....	94
2.2	法主に対する宗門世論の変化.....	96
2.3	異議申し立てとしての近代教学.....	97
3	宗憲改正の過程.....	99
3.1	宗憲の特徴——聖なる面と俗なる面.....	99
3.2	聖なる地位と俗なる地位.....	99
4	法学を介した民主主義のロジック.....	100
4.1	宗憲改正委員会の構成.....	100
4.2	法学と教団改革——提言者としての川島武宜.....	101
4.3	川島の提言内容——改革の法学的根拠づけ.....	102
5	改革運動の帰結.....	105
第8章	まとめ.....	107
1	本研究のまとめ.....	107
1.1	各章のまとめ.....	107
1.2	先行研究に対して本研究が明らかにしたこと.....	110
2	改革がもたらしたもの.....	112
2.1	生活と乖離する宗教.....	112
2.2	合理化する宗教の正統化——娯楽の排除.....	114
2.3	教学者と戦争との関わり.....	115
3	本研究の社会学的意義.....	117
3.1	社会学理論上の意義.....	117
3.2	学説史上の意義.....	118
4	今後の課題.....	119
	参考文献.....	121

5年以内に出版予定。

## 参考文献

- 相沢好則, 1986, 「宗教法の研究ということ——宗教法の研究の方法論的覚書き」『宗教法』4: 34-49.
- 赤江達也, 2013, 『「紙上の教会」と日本近代——無教会キリスト教の歴史社会学』岩波書店.
- , 2017, 『矢内原忠雄——戦争と知識人の使命』岩波書店.
- 赤岩栄, 1949, 「基督者の入党——共産党と知識人」『文藝春秋』27(3): 22-4.
- 赤澤史朗, 1985, 『近代日本の思想動員と宗教統制』校倉書房.
- , 2005, 『靖国神社——せめぎあう〈戦没者追悼〉のゆくえ』岩波書店.
- 暁烏敏, 1942, 『臣民道を行く』一生堂書店.
- , 1943, 「大東亞を築く心」『昭徳』8(4): 30-4.
- , [1950] 1977, 「亀井勝一郎氏の問いに答へて」暁烏敏全集刊行会編『暁烏敏全集 第19巻』涼風学舎, 483-506.
- 阿満利磨, 2000, 『信に生きる——親鸞』中央公論新社.
- 天野正子, 1996, 『「生活者」とはだれか——自律的市民像の系譜』中央公論新社.
- 有元正雄, 1995, 『真宗の宗教社会史』吉川弘文館.
- Asad, Talal, 2003, *Formations of the Secular: Christianity, Islam, Modernity*, Stanford: Stanford University Press. (中村圭志訳, 2006, 『世俗の形成——キリスト教、イスラム、近代』みすず書房.)
- Barshay, Andrew E, 2019, "The Protestant Imagination: Robert Bellah, Maruyama Masao and the Study of Japanese Thought," Matteo Bortolini ed. *The Anthem Companion to Robert N. Bellah*, London and New York: Anthem Press, 191-213.
- Bellah, Robert N, 1967, "Religious Evolution," in *Beyond Belief: Essays on Religion in a Post-Traditional World*, Berkeley: University of California Press, 20-50. (河合秀和訳, 1973, 「宗教の進化」『社会変革と宗教倫理』未来社, 49-89.)
- , 1985, *Tokugawa Religion: The Cultural Roots of Modern Japan*, New York: Free Press. (池田昭訳, 1996, 『徳川時代の宗教』岩波書店.)
- , 2003, "Introduction," in *Imagining Japan: The Japanese Tradition and Its Modern Interpretation*, Berkeley: University of California Press, 1-62.
- , 2011, *Religion in Human Evolution: From the Paleolithic to the Axial Age*, Cambridge: Harvard University Press.
- ベラー, ロバート・N, 2014a, 「グローバルな市民社会と市民宗教の可能性」ロバート・N・ベラー／島蘭進／奥村隆編『宗教とグローバル市民社会——ロバート・ベラーとの対話』岩波書店, 2-29.
- , 2014b, 「進化・遊び・宗教——人類進化における宗教について」ロバート・N・ベラー／島蘭進／奥村隆編『宗教とグローバル市民社会——ロバート・ベラーとの対話』岩波書店, 46-69.
- Bellah, Robert N, Richard Madsen, William M. Sullivan, Ann Swidler, Steven M. Tipton, 1985,

- Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*, Berkeley: University of California Press. (島蘭進・中村圭志訳, 1991, 『心の習慣——アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房.)
- Berger, Peter L, 1967, *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*, New York: Doubleday. (蘭田稔訳, 2018, 『聖なる天蓋』新曜社.)
- , 1969, *A Rumor of Angels: Modern Society and the Rediscovery of the Supernatural*, New York: Doubleday. (荒井俊次訳, 1982, 『天使のうわさ——現代における神の再発見』ヨルダン社.)
- , 1999, “The Desecularization of the World: A Global Overview,” Peter Berger ed., *The Desecularization of the World: Resurgent Religion and World Politics*, Washington: Ethics and Public Policy Center and W. B. Eerdmans, 1-18.
- Bourdieu Pierre, 1980, *Le sens pratique*, Paris: Les Éditions de Minuit. (今村仁司・港道隆訳, 1988, 『実践感覚 1』みすず書房.)
- Brubaker, Rogers, 2015, *Grounds for Difference*, Cambridge: Harvard University Press.
- 文化庁編, 1967, 『宗教年鑑昭和 41 年版』文化庁.
- , 1968, 『宗教年鑑昭和 42 年版』文化庁.
- , 2020, 『宗教年鑑 令和 2 年版』文化庁.
- Casanova, Jose, 1994, *Public Religions in the Modern World*, Chicago: The University of Chicago. (津城寛文訳, 2021, 『近代世界の公共宗教』筑摩書房.)
- Debray, Régis, 1997, *Transmettre*, Paris: Odile Jacob. (西垣通監修・嶋崎正樹訳, 2000, 『メディアオロジー入門——「伝達作用」の諸相』NTT 出版.)
- 出口剛司, 2002, 『エーリッヒ・フロム——希望なき時代の希望』新曜社.
- DiMaggio, Paul J. and Walter W. Powell, 1991a, “Introduction,” Walter W. Powell and Paul J. DiMaggio eds., *The New Institutionalism in Organizational Analysis*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 1-38.
- , 1991b, “The Iron Cage Revisited: Institutional Isomorphism and Collective Rationality in Organization Fields,” Walter W. Powell and Paul J. DiMaggio eds., *The New Institutionalism in Organizational Analysis*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 63-82.
- Dobbelaere, Karel, 1985, “Secularization Theories and Sociological Paradigms: A Reformulation of the Private-Public Dichotomy and the Problem of Societal Integration,” *Sociological Analysis*, 46(4): 377-87.
- , 1999, “Towards an Integrated Perspective of the Processes Related to the Descriptive Concept of Secularization,” *Sociology of Religion*, 60(3): 229-47.
- 「同朋教団に生きる会」編, 1982, 『いかなる国土を願うのか』.
- Durkheim, Émile, 1912, *Les formes élémentaire de la vie religieuse, le système totémique en Australie*, Paris: Les Presses universitaires de France. (山崎亮訳, 2014, 『宗教生活の基本形態——オーストラリアにおけるトーテム体系 上・下』筑摩書房.)
- Finke, Roger and Patricia Wittberg, 2000, “Organizational Revival from within: Explaining Revivalism and Reform in the Roman Catholic Church,” *Journal for the Scientific Study of Religion*, 39(2): 154-70.

- 藤井正雄, 1974, 『現代人の信仰構造——宗教浮動人口の行動と思想』 評論社.
- 藤原聖子, 2019, 「公共宗教論を規定していたもの——『法律—権利問題化』と『経済—市場原理化』に翻弄される宗教と宗教言説」『思想』 1139: 82-100.
- 深澤英隆, 2006, 『啓蒙と霊性——近代宗教言説の生成と変容』 岩波書店.
- 舟津昌平, 2019, 「制度ロジック多元性下における組織のイノベーションマネジメント」『赤門マネジメント・レビュー』 18(4): 117-45.
- , 2020, 「制度ロジック多元性下において科学と事業を両立させる組織の対応——産学連携プロジェクトを題材とした事例研究」『組織科学』 54(2): 48-61.
- Friedland, Roger and Robert R. Alford, 1991, “Bringing Society Back In: Symbols, Practices, and Institutional Contradictions,” Walter W. Powell and Paul J. DiMaggio eds., *The New Institutionalism in Organizational Analysis*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 232-63.
- Friedland, Roger, 2002, “Money, Sex, and God: The Erotic Logic of Religious Nationalism,” *Sociological Theory*, 20 (3): 382-425.
- 福島栄寿, 2006, 「日本主義的教養と 1930 年代の仏教者——暁烏敏と記紀神話の世界」『季刊日本思想史』 69: 86-104.
- 福島和人, 1995, 『親鸞思想——戦時下の諸相』 法藏館.
- 不破仁, 1984, 「真宗大谷派宗憲改正の基本的理念について」『宗教法』 2: 88-109.
- Geertz, Clifford, 1973, *The Interpretation of Cultures*, New York: Free Press. (吉田禎吾ほか訳, 1987, 『文化の解釈学 I・II』 岩波書店.)
- Göle, Nilufer, 2015, *Islam and Secularity: The Future of Europe’s Public Sphere*, Durham: Duke University Press.
- Gorski, Philip S, 2000, “Historicizing the Secularization Debate: Church, State, and Society in Late Medieval and Early Modern Europe, CA. 1300 to 1700,” *American Sociological Review*, 65: 138-67.
- , 2003, *The Disciplinary Revolution: Calvinism and the Rise of the State in Early Modern Europe*, Chicago and London: The University of Chicago Press.
- , 2018, “The Origin and Nature of Religion: A Critical Realist View,” *Harvard Theological Review*, 111(2): 289-304.
- Gorski, Philip S and Ateş Altınordu, 2008, “After Secularization?,” *Annual Review of Sociology*, 34: 55-85.
- Habermas, Jürgen, 2005, “Vorporpolitische Grundlagen des demokratischen Rechtsstaates?” Jürgen Habermas und Joseph Ratzinger, *Dialektik der Säkularisierung über Vernunft und Religion*, Freiburg im Breisgau: Herder. (三島憲一訳, 2007, 「民主主義的法治国家における政治以前の基盤」『ポスト世俗化時代の哲学と宗教』 岩波書店.)
- ハーデカ, ヘレン, 2021, 「占領と宗教」島藺進・大谷栄一・末本文美士・西村明編『近代日本宗教史 第5巻 敗戦から高度成長へ——敗戦～昭和中期』 春秋社, 36-58.
- 長谷川如是閑, 1930a, 「歴史の現段階に於ける宗教の地位」中外日報東京支局編『マルキシズムと宗教』 大鳳閣書房, 1-11.
- , 1930b, 「寺院と社会との交渉及び没交渉——並にその暴力化」 中外日報東京支

- 局編『マルキシズムと宗教』大鳳閣書房, 12-7.
- 服部之総, 1930, 「三木清氏の宗教学」中外日報東京支局編『マルキシズムと宗教』大鳳閣書房, 41-52.
- , 1936, 「あいさつ状」(再録: 1976, 『服部之総全集 24——句稿・草稿』福村出版, 246-8.)
- , 1948, 『親鸞ノート』国土社。(再録: 1973, 『服部之総全集 13 親鸞』福村出版, 12-156.)
- 服部之総・新島繁・本田喜代治・荒正人・飯島衛, 1949, 「座談会 生きている宗教」『日本評論』24(3): 30-45.
- 林淳, 2008, 「マルクス主義と宗教起源論——『中外日報』の座談会を中心に」磯前順一／ハリー・D・ハルトゥニーアン編『マルクス主義という経験——1930-40年代日本の歴史学』青木書店, 157-191.
- 林暁宇, 1992, 『念仏総長暁鳥敏——一にも信心 二にも信心』具足舎.
- 日野賢憬, 1950a, 「私の遍歴——真人社と教団(上)」『真人』22: 4.
- , 1950b, 「私の遍歴——真人社と教団(中)」『真人』23: 4.
- 平野武, 1988, 『西本願寺寺法と「立憲主義」——近代日本の国家形成と宗教組織』法律文化社.
- 菱木政晴, 1993, 『浄土真宗の戦争責任』岩波書店.
- 久木幸男, 1995, 『検証 清沢満之批判』法藏館.
- 本多弘之, 1995, 『近代親鸞教学論』草光舎.
- , 2019, 『師・安田理深論』大法輪閣.
- 本多賢純, 1948, 「真人往還」『真人』4: 21-22.
- 本郷浩二, 2017, 「武内了温の部落問題論——真宗大谷派における融和運動の軌跡」揖龍地域教材史料刊行会編『武内了温関係資料集——軌跡とその系譜』真宗大谷派(東本願寺)解放運動推進本部, 90-101.
- 星谷慶縁編, 1943, 『真宗大谷派本願寺要覧』大谷派宗務所.
- 市川白弦, 1993, 『市川白弦全集 第3巻 仏教の戦争責任』法藏館.
- 家永三郎, 1940, 『日本思想史に於ける否定の論理の発達』弘文堂書房。(再録: 1997, 『家永三郎集第一巻 思想史論』岩波書店, 3-78.)
- 飯田泰三, 1997, 『批判精神の航跡——近代日本精神史の一稜線』筑摩書房.
- , 2017, 『大正知識人の思想風景——「自我」と「社会」の発見とそのゆくえ』法政大学出版会.
- 井門富二夫, 1962, 「既成教団の再組織——自省のために」『真宗』1962年12月号: 80-6.
- , 1964, 「教団組織論序説——産業社会における教団体制の変容」『東洋文化研究所紀要』34: 109-225.
- 井門富二夫編, 1993, 『占領と日本宗教』未來社.
- 今村仁司, 2001a, 「解題」今村仁司編訳『現代語訳 清沢満之語録』岩波書店, 453-60.
- , 2001b, 「解説」今村仁司編訳『現代語訳 清沢満之語録』岩波書店, 461-88.
- , 2001c, 「あとがき」今村仁司編訳『現代語訳 清沢満之語録』岩波書店, 489-90.

- 今村仁司・末木文美士, 2004, 「清沢満之と仏教の今日的再生」『思想』967: 128-46.
- 稲場圭信・櫻井義秀編, 2009, 『社会貢献する宗教』世界思想社.
- 猪瀬優里, 2011, 『信仰はどのように継承されるか——創価学会にみる次世代育成』北海道大学出版会.
- 井上順孝, 2019, 「新興宗教から近代新宗教へ——新宗教イメージ形成の社会的背景と研究視点の変化」堀江宗正編『宗教と社会の戦後史』東京大学出版会, 267-93.
- 井上鋭夫, [1966] 2008, 『本願寺』講談社.
- 井上善幸, 2012, 「如来の化身としての親鸞・一学徒としての親鸞」幡鎌一弘編『語られた教祖——近世・近現代の信仰史』法藏館, 95-124.
- 入江正信編, 2003a, 『東本願寺をめぐる争訟事例集 第1巻』商事法務.  
 ——編, 2003b, 『東本願寺をめぐる争訟事例集 第2巻』商事法務.  
 ——編, 2003c, 『東本願寺をめぐる争訟事例集 第3巻』商事法務.
- 石井公成, 2004, 「宗教者の戦争責任——市川白弦その人の検証を通して」池上良正・小田淑子・島蘭進・末木文美士・関一敏・鶴岡賀雄編『岩波講座 宗教8 暴力——破壊と秩序』岩波書店, 223-49.
- 石井公成監修／近藤俊太郎・名和達宣編, 2020, 『近代の仏教思想と日本主義』法藏館.
- 磯前順一・山本達也編, 2011, 『宗教概念の彼方へ』法藏館.
- Jaspers, Karl, 1949, *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, München: R. Piper. (重田英世訳, 1964, 『ヤスパース選集 IX 歴史の起源と目標』理想社.)
- Jurgensmeyer, Mark, 2020, *God at War: A Meditation on Religion and Warfare*, New York and Oxford: Oxford University Press.
- 神田千里, 1991, 『真宗の信仰と一向一揆』吉川弘文館.
- 鹿野政直, 1977, 「解説」鹿野政直編『近代日本思想体系 34 大正思想集 II』筑摩書房, 419-64.
- 荻谷剛彦, 2019, 『追いついた近代 消えた近代——戦後日本の自己像と教育』岩波書店.
- 笠原一男, 1962a, 『一向一揆の研究』山川出版社.  
 ——, 1962b, 『真宗における異端の系譜』東京大学出版会.
- 柏原祐泉, 1986, 『近代大谷派の教団——明治以降宗政史』真宗大谷派宗務所出版部.  
 ——, 2000, 『真宗史仏教史の研究 III 近代篇』平樂寺書店.
- 川島武宜, 1946, 「日本社会の家族的構成」『中央公論』61(6): 27-37. (再録: 2000, 『日本社会の家族的構成』岩波書店, 1-30.)  
 ——, 1967a, 『日本人の法意識』岩波書店.
- 川島武宜, 1967b, 「宗教エリートの錬成について」『宗教教化学研究会紀要』1: 3-27.  
 ——, 1978, 『ある法学者の軌跡』有斐閣.  
 ——, 1981, 「国家法と宗教団体」『真宗』1981年9月号: 47-57.  
 ——, 1987, 『新版 所有権法の理論』岩波書店.
- 木越康, 2014, 『ボランティアは親鸞の教えに反するのか——他力理解の相克』法藏館.
- 清沢満之, 1896, 「革新の要領」『教界時言』3: 1-11. (再録: 2003, 大谷大学編『清沢満之全集第七巻——仏教の革新』岩波書店, 23-33.)
- 小林杜人, 1987, 『「転向期」のひとびと——治安維持法下の活動家群像』新時代社.

- 古賀制二, 1981, 「宗憲制定に至るまでの戦後宗門の歩み」『真宗』1981年9月号: 7-14.
- 近藤俊太郎, 2013, 『天皇制国家と「精神主義」——清沢満之とその門下』法藏館.
- , 2021, 『親鸞とマルクス主義——闘争・イデオロギー・普遍性』法藏館.
- 虎頭祐正, 2001, 「安田先生と訓覇・三浦各氏をめぐって」訓覇信雄論集刊行会編『訓覇信雄論集 第一巻』法藏館, 197-226.
- 小山聡子, 2017, 『浄土真宗とは何か——親鸞の教えとその系譜』中央公論新社.
- 子安宣邦, 2014, 『歎異抄の近代』白澤社.
- 子安宣邦編, 2017, 『三木清遺稿「親鸞」——死と伝統について』白澤社.
- 久野収・鶴見俊輔・藤田省三, [1966]1995, 「大衆の思想——討論」久野収・鶴見俊輔・藤田省三編『戦後日本の思想』岩波書店, 182-209.
- 訓覇信雄, 1969, 「宗門百年に誤りなきを期して」『真宗』1969年11月号: 2-3.
- , 1999, 『死して生きる——仏教回復の使命』法藏館.
- 教学研究所編, 1999, 『教化研究——資料 真宗と国家 IV 下 中国東北戦争期・後篇』真宗大谷派教学研究所.
- 編, 2001, 『教化研究——資料 真宗と国家 V 上 日中戦争期・前篇』真宗大谷派教学研究所.
- 編, 2004, 『教化研究——資料 真宗と国家 V 中 日中戦争期・中篇』真宗大谷派教学研究所.
- 編, 2009, 『教化研究——資料 真宗と国家 VI 上 太平洋戦争期・前篇』真宗大谷派教学研究所.
- 編, 2013, 『教化研究——資料 真宗と国家 VI 下 太平洋戦争期・後篇』真宗大谷派教学研究所.
- 教化研究所編, 1954, 『農村と寺院——実態調査 教団のすがた』教化研究所.
- , 1956, 『新興宗教の実態』教化研究所.
- , 1957, 『清沢満之の研究』教化研究所.
- Luckmann, Thomas, 1967, *The Invisible Religion: The Problem of Religion in Modern Society*, The Macmillan Company: New York. (赤池憲昭／ヤン・スィンゲドー訳, 1976, 『見えない宗教——現代宗教社会学入門』ヨルダン社.)
- Luhmann, Niklas, 1977, *Funktion der Religion*, Suhrkamp Verlag: Frankfurt. (土方昭・三瓶憲彦訳, 1999, 『宗教社会学——宗教の機能』新泉社.)
- McFarland, Neil Horace, 1967, *The Rush Hour of the Gods: A Study of New Religious Movements in Japan*, New York: Macmillan. (内藤豊・杉本武之, 1969, 『神々のラッシュアワー——日本の新宗教運動』社会思想社.)
- McLaughlin, Levi, Aike P. Rots, Jolyon Baraka Thomas and Chika Watanabe, 2020, “Why Scholars of Religion Must Investigate the Corporate Form,” *American Academy of Religion*, 88(3): 693-725.
- 丸山眞男, 1961, 『日本の思想』岩波書店.
- , 1998, 『丸山眞男講義録第四冊——日本政治思想史 1964』東京大学出版会.
- 丸山照雄, 1975, 「現代を生きる『僧』の二つの典型——訓覇信雄師と藤井日達師の場合」『思想』613: 70-93.

- , 1979, 「東本願寺構想とは何か——現代仏教改革への現実的展望」『世界』403: 262-73.
- 松原祐善, 1948, 「真宗教団の理念」『真人』7: 11-13.
- , 1949, 「後記」『真人』11: 15.
- 松本三和夫, 1998, 「日本市民社会と科学技術——日本の戦時研究と軍民転換」青井和夫・高橋徹・庄司興吉編『現代市民社会とアイデンティティ——21世紀の市民社会と共同性: 理論と展望』梓出版社, 52-73.
- 松浦馨, 1989, 「宗教上の地位等をめぐる訴訟の手続的諸問題」『宗教法』7: 3-24.
- 三木清, 1930, 「如何に宗教を批判するか」中外日報東京支局編『マルキシズムと宗教』大鳳閣書房, 26-33.
- Milbank, John, 2006, *Theology and Social Theory 2nd Edition*, Oxford: Blackwell Publishing.
- 美濃部昇山, 1948, 「編集後記」『真人』7: 15.
- 三浦節夫, 2006a, 「既成仏教教団の構造——真宗大谷派の教勢調査に基づいて」『宗教研究』80(3): 595-617.
- , 2006b, 「『高木宏夫著作集』について」『高木宏夫著作集 3 天皇制／真宗教団』フクイン, 511-7.
- 宮部峻, 2021, 「戦後日本社会における『大衆』と『宗教』——高木宏夫の宗教研究の理論的再評価を通じて」『現代社会学理論研究』15: 111-23.
- 森岡清美, [1962] 2018, 『新版 真宗教団と「家」制度』法藏館.
- , 1963, 「大戦の終結と真宗教団の再編」赤松俊秀・笠原一男編『真宗史概説』平樂寺書店, 519-28.
- , 1968, 「真宗教団論——真宗教団への提言」『真宗』1968年6月号: 4-11.
- , [1978] 2005, 『増補版 真宗教団における家の構造』御茶の水書房.
- , 1989, 『新宗教運動の展開過程——教団ライフサイクル論の視点から』創文社.
- , 2016, 『真宗大谷派の革新運動——白川党・井上豊忠のライフヒストリー』吉川弘文館.
- 永岡崇, 2015, 『新宗教と総力戦——教祖以後を生きる』名古屋大学出版会.
- 内藤莞爾, 1978, 『日本の宗教と社会』御茶の水書房.
- 中根千枝, 1967, 『タテ社会の人間関係——単一社会の理論』講談社.
- 中西直樹, 2004, 『仏教と医療・福祉の近代史』法藏館.
- 名和達宣, 2017, 「本の紹介『真宗大谷派の革新運動——白川党・井上豊忠のライフヒストリー』」『教化研究』160: 200-1.
- , 2020, 「真宗大谷派の教学と日本主義——曾我量深を基点として」石井公成監修／近藤俊太郎・名和達宣編『近代の仏教思想と日本主義』法藏館, 45-76.
- 仁平典宏, 2011, 『「ボランティア」の誕生と終焉——〈贈与のパラドックス〉の知識社会学』名古屋大学出版会.
- 日本人文科学会編, 1951, 『封建遺制』有斐閣.
- 新野和暢, 2014, 『皇道仏教と大陸布教——十五年戦争期の宗教と国家』社会評論社.
- 西村明, 2021, 「総論——体制の転換とコスモロジーの変容」島蘭進・大谷栄一・末木文美士・西村明編『近代日本宗教史 第5巻 敗戦から高度成長へ——敗戦～昭和中期』

- 春秋社, 4-34.
- 西山茂, 1992, 「研究対象としての新宗教——宗社研の新宗教研究と新宗教の戦略高地性」  
宗教社会学研究会編『いま、宗教をどうとらえるか』海鳴社, 82-100.
- 野本永久, 1974, 『暁烏敏傳』大和書房.
- 落合誓子, 1979, 『貴族の死滅する日——東本願寺十年戦争の真相』晩声社.
- 小口偉一, 1951, 「宗教集団における封建遺制の問題」日本文科学会編『封建遺制』有斐閣, 93-108.
- 碧海寿広, 2014, 『近代仏教のなかの真宗——近角常観と求道者たち』法藏館.
- , 2021, 「清沢満之と吉田久一」大谷栄一・大友昌子・永岡正己・長谷川匡俊・林淳編『吉田久一とその時代——仏教史と社会事業史の探求』法藏館, 443-66.
- 岡田正彦, 1990, 「近代における宗教伝統の変容——真宗大谷派の宗務機構の近代化」『宗教研究』64(3): 1-26.
- , 2007, 「伝統的仏教教団のグローバル化前夜——教団近代化運動と『教団=宗教』モデル」住原則也編『グローバル化のなかの宗教——文化的影響・ネットワーク・ナラロジー』世界思想社, 130-52.
- 大石眞, 1996, 『憲法と宗教制度』有斐閣.
- 大村英昭, 1988, 「現代人と宗教」大村英昭・西村茂編『現代人の宗教』有斐閣, 1-31.
- , 1990a, 『死ねない時代——いま、なぜ宗教か』有斐閣.
- , 1990b, 「社会現象としての宗教——宗教は鎮めの文化装置」宇沢弘文・河合隼雄・藤沢令夫・渡辺慧編『岩波講座 転換期における人間9——宗教とは』岩波書店, 139-64.
- , 1990c, 「鎮めのエートス論——ポスト・モダン教学のために」大村英昭・金児曉嗣・佐々木正典編『ポスト・モダンの親鸞——真宗信仰と民俗信仰のあいだ』同朋舎, 35-51.
- , 1990d, 「ポスト・モダンと習俗・迷信」大村英昭・金児曉嗣・佐々木正典編『ポスト・モダンの親鸞——真宗信仰と民俗信仰のあいだ』同朋舎, 55-81.
- , 1995, 「神仏分離と浄土真宗」日本仏教研究会編『日本の仏教4——近世・近代と仏教』109-26.
- , 1996, 『現代社会と宗教——宗教意識の変容』岩波書店.
- , 2003, 『臨床仏教学のすすめ』世界思想社.
- 大村英昭・金児曉嗣・佐々木正典, 1990, 「モダニズムからの脱却」大村英昭・金児曉嗣・佐々木正典編『ポスト・モダンの親鸞——真宗信仰と民俗信仰のあいだ』同朋舎, 3-22.
- 大西修, 1995, 『戦時教学と浄土真宗——ファシズム下の仏教思想』社会評論社.
- 大澤絢子, 2016, 「浩々洞同人による『歎異抄』読解と親鸞像——倉田百三『出家とその弟子』への継承と相違」『宗教研究』90(3): 27-50.
- 大谷大学編, 2003, 『清沢満之全集第六巻——精神主義』岩波書店.
- 大谷栄一, 1995, 「宗教社会学における『内在的理解』をめぐる認識論的問題に関するノート」『現代社会理論研究』5: 221-31.
- , 2001, 『近代日本の日蓮主義運動』法藏館.

- , 2012, 『近代仏教という視座——戦争・アジア・社会主義』ペリカン社.
- , 2019, 『日蓮主義とはなんだったのか——近代日本の思想水脈』講談社.
- 大谷瑩潤, 1950, 「このようなひとを」『真宗』1950年11月号: 3.
- 大谷派本願寺社会課, 1924, 『地方改善方針』.
- 大谷派社会事業協会, 1925, 『大谷派本願寺社会事業調査参考資料』.
- Riesebrodt, Martin, 2009, *The Promise of Salvation: A Theory of Religion*, Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Sandberg, Russell, 2014, *Religion, Law and Society*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 佐々木悠, 1948, 「無題」『真人』4.
- , 1949, 「階級闘争と真宗」『真人』14: 1.
- 佐々木政文, 2017, 「昭和初期司法省の転向誘発政策と知的情報統制——司法権力による『読み』・『書き』の掌握過程」『歴史学研究』965: 1-16.
- 佐藤郁哉, 2003, 「制度固有のロジックから『ポートフォリオ戦略へ』——学術出版における意思決定過程に関する制度論的考察」『組織科学』36(3): 4-17.
- 佐藤健二, 2019, 「戦争社会学とはなにかをめぐって」『戦争社会学研究』3: 150-78.
- 佐藤俊樹, 1993, 『近代・組織・資本主義——日本と西欧における近代の地平』ミネルヴァ書房.
- 関山和夫, 1973, 『説教の歴史的研究』法藏館.
- 繁田真爾, 2019, 『「悪」と統治の日本近代——道徳・宗教・監獄教誨』法藏館.
- , 2021, 「吉田久一史学の構造と方法——主体と対象史の関係論をめぐって」大谷栄一・大友昌子・永岡正己・長谷川匡俊・林淳編『吉田久一とその時代——仏教史と社会事業史の探求』法藏館, 467-96.
- シュローダー・ジェフ, 2016, 「仏教思想の政治学」山本伸裕・碧海寿広編『清沢満之と近代日本』法藏館, 195-217.
- 島蘭進, 2000, 「現代宗教と公共空間——日本の状況を中心に」『社会学評論』50(4): 541-55.
- , 2004, 「社会の個人化と個人の宗教化——ポストモダン（第2の近代）における再聖化」『社会学評論』54(4): 431-48.
- , 2008, 「宗教言説の形成と近代的個人の主体性——内村鑑三と清沢満之の宗教論と普遍的超越性」『季刊日本思想史』72: 32-52.
- , 2010, 『国家神道と日本人』岩波書店.
- , 2012, 『現代社会学ライブラリー8 現代宗教とスピリチュアリティ』弘文堂.
- , 2013, 『日本仏教の社会倫理——「正法」理念から考える』岩波書店.
- , 2016, 「新宗教研究と近代性の理解——戦後の宗教社会学とその周辺」池岡義孝・西原和久編『戦後日本社会学のリアリティ——せめぎあうパラダイム』東信堂, 203-29.
- 島蘭進・大谷栄一・末本文美士・西村明編, 2021a, 『近代日本宗教史 第1巻 維新の衝撃——幕末～明治前期』春秋社.
- , 2021b, 『近代日本宗教史 第2巻 国家と信仰——明治後期』春秋社.
- , 2021c, 『近代日本宗教史 第3巻 教養と生命——大正期』春秋社.
- , 2021d, 『近代日本宗教史 第4巻 戦争の時代——昭和初期～敗戦』春秋社.

- , 2021e, 『近代日本宗教史 第5巻 敗戦から高度成長へ——敗戦～昭和中期』春秋社.
- , 2021f, 『近代日本宗教史 第6巻 模索する現代——昭和後期～平成期』春秋社.
- 真人社, 1949, 「各地真人社めぐり 3」『真人』8: 11.
- , 1951, 「頌」『真人』35: 1-2.
- 塩田治巳, 1977, 「伝統と現代の狭間に——真宗同朋会」『国際宗教ニュース』16(1・2): 72-81.
- Smith, Christian, 2017, *Religion: What It Is, How It Works, and Why It Matters*, Princeton: Princeton University Press.
- Smith, Christian, Brandon Vaidyanathan, Nancy Tatom Ammerman, José Casanova, Hilary Davidson, Elaine Howard Ecklund, John H. Evans, Philip S. Gorski, Mary Ellen Konieczny, Jason A. Springs, Jenny Trinitapoli, Meredith Whitnah, 2013, “Roundtable on the Sociology of Religion: Twenty-Three Theses on the Status of Religion in American Sociology——A Mellon Working-Group Reflection,” *Journal of the American Academy of Religion*, 81(4): 903-38.
- 曾我量深, 1957, 「大衆を統理して一切無碍ならん」『真人』100: 1-5.
- 末木文美士, 2004, 「仏教の非神話化とそのゆくえ——今村仁司『清沢満之と哲学』をめぐって」『思想』967: 113-27.
- , 2005, 「近代日本の仏教と国家」『宗教研究』79(2): 547-68.
- , 2016, 「清沢満之研究の今——『近代仏教』を超えられるか？」山本伸裕・碧海寿広編『清沢満之と近代日本』法蔵館, 3-26.
- Sullivan, Winnifred F, 2005, *The Impossibility of Religious Freedom*, Princeton: Princeton University Press.
- 鈴木広, 1970, 『都市的世界』誠信書房.
- Swidler, Ann, 1986, “Culture in Action: Symbols and Strategies,” *American Sociological Review*, 51(2): 273-86.
- 田原由紀雄, 2004, 『東本願寺三十年紛争』白馬社.
- 高木宏夫, 1958, 『新興宗教——大衆を魅了するもの』講談社. (再録: 2006, 『高木宏夫著作集 1——日本の新興宗教』フクイン, 1-187.)
- , 1959a, 『日本の新興宗教——大衆思想運動の歴史と論理』岩波書店. (再録: 2006, 『高木宏夫著作集 1——日本の新興宗教』フクイン, 189-366.)
- , 1959b, 「日本の大衆の人生問題——価値変革への契機をどうとらえるか」『思想』425: 57-74. (再録: 2006, 『高木宏夫著作集 1——日本の新興宗教』フクイン, 379-412.)
- 高木宏夫, 1959c, 「宗教法——法体制準備期」鶴飼信成・福島正夫・川島武宜・辻清明編『講座日本近代法発達史 第7巻——資本主義と法の発展』勁草書房, 1-38. (再録: 2006, 『高木宏夫著作集 2——近代日本の宗教』フクイン, 135-70.)
- , 1962, 「近代日本の宗教 (12) ——現代の課題」『大法輪』29 (12): 170-6. (再録: 2006, 『高木宏夫著作集 2——近代日本の宗教』フクイン, 318-28.)
- , 1977, 「はじめに」高木宏夫編『人間性回復への道——同朋の会・運動までの一典型』法蔵館, 1-4.

- , 1978a, 「同朋会運動（真宗大谷派）と門信徒会運動（浄土真宗本願寺派）の“実態”を初めて徹底比較研究する」『月刊住職』5 (12): 2-15. (再録: 2006, 「真宗のモデル」『高木宏夫著作集3——天皇制／真宗教団』フクイン, 273-94.)
- , 1978b, 「はじめに」高木宏夫編『行証に生きる人——同朋会運動の問題点』法蔵館, 1-4.
- , 1980, 「伝統教団が取組んだ現代化運動」現代仏教を知る大事典編集委員会編『現代仏教を知る大事典』金花舎, 37-43. (再録: 2006, 「真宗のモデル」『高木宏夫著作集3——天皇制／真宗教団』フクイン, 255-73.)
- , 2001, 「訓覇総長と同朋会運動」訓覇信雄論集刊行会編『訓覇信雄論集 第四巻——修道の人間の誕生』法蔵館, 173-202. (再録: 2006, 『高木宏夫著作集3——天皇制／真宗教団』フクイン, 469-95.)
- 高木宏夫編, 1977, 『人間性回復への道——同朋の会 運動までの一典型』法蔵館.
- , 1978, 『行証に生きる人——同朋会運動の問題点』法蔵館.
- 高木八尺編, 1969, 『文化と宗教——ティリッヒ博士講演集』岩波書店.
- 高橋由典, 1992, 「戦争協力の論理と心理——キリスト教の事例」戦時下日本社会研究会編『戦時下の日本——昭和前期の歴史社会学』行路社, 323-42.
- 竹田淳照, 1957, 「余談」『真人』100: 39-40.
- 武内了温, 1933, 「思想対策と真宗 (三)」『真宗』1933年10月号, 2-7.
- 竹内洋, [2011] 2015, 『革新幻想の戦後史 (下)』中央公論新社.
- 竹内洋・佐藤卓己編, 2006, 『日本主義的教養の時代——大学批判の古層』柏書房.
- 玉野和志, 2005, 『東京のローカル・コミュニティ——ある町の物語 1900-1980』東京大学出版会.
- 谷口慶次郎, 1935, 「赤裸々の生活記——絶望の転向者は宗教によつて如何に救はれたか」小林杜人編『転向者の思想と生活』大道社, 238-54.
- 谷口知平, 1982, 「本山・末寺と包括・被包括宗教法人寺院——本山と宗派一本化の問題について」『龍谷法学』15(2): 137-57. (再録: 1991, 『不法行為・宗教法の研究』有斐閣, 401-22.)
- , 1983, 「発刊の辞」『宗教法』1.
- , 1984, 「問題提起」『宗教法』2: 1-7.
- Taylor, Charles, 2007, *A Secular Age*, Cambridge: Harvard University Press. (千葉眞監訳／木部尚志・山岡龍一・遠藤知子・石川涼子・梅川佳子・高田宏史・坪光生雄訳, 2020, 『世俗の時代 上・下』名古屋大学出版会.)
- 寺田善朗・塚田穂高, 2016, 「教団類型論と宗教運動論の架橋——日本の新宗教の事例から」寺田善朗・塚田穂高・川又俊則・小島伸之編『近現代日本の宗教変動』ハーベスト社, 25-52.
- 寺川俊昭, 1960, 「伝統をうけて」『教化研究』24: 24-30.
- , 1973, 『念仏の僧伽を求めて——近代における真宗大谷派の教団と教学の歩み』同朋会推進事務所.
- , 1974, 『続・念仏の僧伽を求めて——明治から現代にいたる真宗大谷派の歩み』同朋会推進事務所.

- 寺川俊昭・兩瀬正雄, 1953, 「真宗と呪術——教團實態調査覺書 No. 1」『教化研究』2: 34-7.
- Tillich, Paul, 1957, *Dynamics of Faith*, New York: Harper & Row. (谷口美智雄訳, 1961, 『信仰の本質と動態』新教出版社.)
- 徳岡秀雄, 2006, 『宗教教誨と浄土真宗——その歴史と現代への視座』本願寺出版社.
- 殿平善彦, 1987, 「『転向』と仏教思想」中濃教篤編『講座日本近代と仏教 6 戦時下の仏教』国書刊行会, 249-79.
- 津田雅夫, 1997, 『文化と宗教——近代日本思想史序論』法律文化社.
- 柘植蘭英, 2001, 「真人社の結成とその歩み」訓覇信雄論集刊行会編『訓覇信雄論集第二巻——信心に生きる』法藏館, 255-301.
- 塚田穂高, 2008, 「高木宏夫の新興宗教研究・再考」『宗教学年報』25: 31-48.
- 鶴見俊輔, [1966] 1995, 「大衆の思想——生活綴り方・サークル運動」久野収・鶴見俊輔・藤田省三編『戦後日本の思想』岩波書店, 153-81.
- 筒井清忠, [1995] 2009, 『日本型「教養」の運命——歴史社会学的考察』岩波書店.  
——, 2006, 『二・二六事件とその時代——昭和期日本の構造』筑摩書房.
- 内手弘太, 2020, 「1930 年前後における西本願寺教団の動向とその思想——布教研究所と『思想問題』」『真宗学』141・142: 347-67.
- 宇野円空, 1930, 「マルキストの論難に宗教はどう対立するか」中外日報東京支局編『マルキシズムと宗教』大鳳閣書房, 53-60.
- 和田稠, 1986, 『信の回復』真宗大谷派宗務所出版部.  
——, 1988, 『このことひとつ』真宗大谷派名古屋別院教務部.
- 脇本平也, 1982, 『評伝 清沢満之』法藏館.
- 渡辺優, 2016, 『ジャン=ジョゼフ・スユラン——17 世紀フランス神秘主義の光芒』慶應義塾大学出版会.
- Weber, Max, 1920a, „Die protestantischen Sekten und der Geist des Kapitalismus,“ *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd. 1*, Tübingen: J.C.B. Mohr, 207-36. (戸田聡訳, 2019, 「プロテスタント諸信団と資本主義の精神」『宗教社会学論集 第 1 巻上』北海道大学出版会, 267-304.)
- , 1920b, “Einleitung,“ *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd. 1*, Tübingen: J.C.B. Mohr. 237-75. (大塚久雄・生松敬三訳, 1972, 「世界宗教の経済倫理——序論」『宗教社会学論選』みすず書房, 31-96.)
- , 1920c, “Zwischenbetrachtung: Theorie der Stufen und Richtungen religiöser Weltablehnung,“ *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd. 1*, Tübingen: J.C.B. Mohr. 536-73. (大塚久雄・生松敬三訳, 1972, 「世界宗教の経済倫理 中間考察——宗教的現世拒否の段階と方向に関する理論」『宗教社会学論選』みすず書房, 97-163.)
- Woodard, William P, 1972, *The Allied Occupation of Japan 1945-1952 and Japanese Religions*, Leiden: E. J. Brill. (阿部美哉訳, 1988, 『天皇と神道——GHQ の宗教政策』サイマル出版会.)
- 山口定, 2004, 『市民社会論——歴史的遺産と新展開』有斐閣.
- 山本伸裕, 2011, 『「精神主義」は誰の思想か』法藏館.

- 山之内靖, 1993, 「戦時期の遺産とその両義性」山之内靖・村上淳一・二宮宏之・佐々木毅・塩沢由典・杉山光信・姜尚中・須藤修編『岩波講座社会科学の方法 第3巻——日本社会科学の思想』岩波書店, 139-161. (再録: 伊豫谷登士翁・成田龍一・岩崎稔編, 2015, 『総力戦』筑摩書房, 168-219.)
- , 1995, 「方法論的序論」山之内靖／ヴィクター・コシュマン／成田龍一編『総力戦と現代化』柏書房, 9-53. (再録: 伊豫谷登士翁・成田龍一・岩崎稔編, 2015, 『総力戦』筑摩書房, 61-130.)
- , 1997, 「総力戦の時代」『世界』634: 16-9. (再録: 伊豫谷登士翁・成田龍一・岩崎稔編, 2015, 『総力戦』筑摩書房, 12-9.)
- , 1999, 「日本の社会科学とマックス・ヴェーバー体験——総力戦の記憶を中心に」『現代思想』27(5): 106-30. (再録: 伊豫谷登士翁・成田龍一・岩崎稔編, 2015, 『総力戦』筑摩書房, 220-95.)
- , 2000, 「1930年代と社会哲学の危機」『思想』917: 5-22. (再録: 伊豫谷登士翁・成田龍一・岩崎稔編, 2015, 『総力戦』筑摩書房, 296-331.)
- 安田理深, 1949, 「教学と教団の問題」『真人』13: 1,4.
- , 1958, 「教団と教学」『教化研究』22: 63-74.
- 安田理深・訓覇信雄, 1971, 「何を解体すべきか」『中央公論』86(10): 181-91.
- 安丸良夫, 1979, 『神々の明治維新——神仏分離と廃仏毀釈』岩波書店.
- , 2002, 「戦後思想史のなかの『民衆』と『大衆』」『岩波講座 近代日本の文化史 9——冷戦体制と資本の文化』岩波書店, 63-104. (再録: 2012, 『現代日本思想論——歴史意識とイデオロギー』岩波書店, 61-108.)
- 安武敏夫, 1983, 「教団をめぐる法的諸問題」『宗教法』1: 26-32.
- , 1984, 「宗教団体紛争の若干の類型と裁判所法第三条第一項」『宗教法』2: 8-20.
- , 1989, 「宗派と本山の法的諸関係の概観——明治期から宗教法人法に至る法制度の変遷との関連において」『宗教法』8: 105-23.
- 安富信哉, 2010, 『近代日本と親鸞——信の再生』筑摩書房.
- , 2012, 「仏教的伝統の回復」安富信哉編『清沢満之集』岩波書店, 297-320.
- 米澤旦, 2018, 「『福祉の市場化・民営化』と労働統合型社会的企業——社会サービス供給組織への新しい見方」『社会政策』9(3): 62-73.
- 吉田久一, 1991, 『吉田久一著作集 5 改訂増補版 日本近代仏教社会史研究 (上)』川島書店.
- , 1992, 『吉田久一著作集 4 日本近代仏教史研究』川島書店.

## 論文の内容の要旨

論文題目 宗教教団の改革運動に関する歴史社会学的研究——真宗大谷派の事例分析  
氏名 宮部 峻

本研究は、真宗大谷派を事例に、宗教教団の改革運動が生成した背景と展開した過程、帰結を分析した。近代化が進み、社会が機能分化することで、宗教の世俗化が進行する。その結果、「組織」としての宗教は、政治、経済、科学、道徳といったその他の世俗的な社会領域とのあいだでこれまでにない葛藤、交渉し、変容を経験してきた。本研究は、近代社会における「組織」としての宗教の変容過程を真宗大谷派の改革運動という事例から明らかにした。

1章では、真宗大谷派の改革運動を社会学的に研究することの意義を論じた。真宗大谷派の改革運動に関する近代仏教史研究、宗教史研究は、主として、信仰の近代化の影響に注目してきた。しかし、改革運動は、組織の合理化・民主化という組織の近代化が追求されていくなかで生じた。真宗大谷派の改革運動とは、信仰の近代化と組織の近代化という二つの近代化が一体となって行われた運動である。本研究では、信仰共同体としての教団と行政組織としての教団という教団組織の二重性に着目し、近代日本における宗教の変容について、制度・環境に信仰と組織の二つを適応させる形で進展した真宗大谷派の事例に即して明らかにすると問題を設定した。

個人の主体的な信仰の確立を追求する信仰の近代化は、ある一時期までは、プロテスタンティズムの精神を自律的で近代的な精神として捉える社会科学のあいだでも高く評価された。しかし、エリート主導による信仰の近代化は、教義の純粹化・高度化・抽象化をもたらし、具体的な悩みを抱える生活者と教義とのあいだで乖離が生じていく。真宗大谷派の改革運動とは、近代社会にふさわしい宗教のあり方が追求されていく一方、現在の宗教が抱える課題の要因を見出すことができる事例でもある。以上の問題関心のもと、2章にて真宗大谷

派の改革運動を研究する分析枠組みを示し、3章から7章にかけて、1920年代から1980年代にかけての真宗大谷派の改革運動に関わる出来事を分析した。

2章では、分析枠組みとして教団組織論を導入し、改革派の特徴と系譜を示した。現在の世俗化論の動向を整理すると、宗教が政治、経済、科学、道徳といった諸領域から分化していく「分化説としての世俗化論」が支持されていることがわかる。現在の世俗化論の経験的研究、歴史研究の課題の一つは、マクロな次元での機能分化とメゾの次元での組織の変容との関係を解明することである。

宗教組織の変容の分析を展開した一人は、宗教社会学者の森岡清美である。森岡は、「家」制度や教団ライフサイクル論に代表される教団組織論を展開した。森岡の教団組織論による真宗教団研究では、戦後の改革運動で生じることとなる、改革派が抱えた組織と信仰の矛盾・葛藤の説明が解くべき課題として残っていた。

そこで、マックス・ヴェーバーの「ゼクテ論文」を手がかりに、教義と組織が動的な関係にあるゼクテのモデルを確認したうえで、真宗大谷派の改革派は、ローマ・カトリック教会の修道会のように、組織の「内側から」社会とのコンフリクトに対応した集団であると捉える視点を導いた。さらに、改革派が教団内でもたらした対立・葛藤は、行政上の主導権争いをめぐって生じていることも踏まえ、信仰共同体としての教団と行政組織としての教団という教団組織の二つの側面に着目し、信仰の近代化と組織の近代化をめぐる複数の制度ロジック間のコンフリクトに注目することとした。実際に、清沢満之にはじまる改革派の特徴と系譜を確認すると、信仰の近代化と組織の近代化との関係を分析しなければ、改革運動が信仰運動から行政運動へと展開していく過程を分析できないことが明らかとなった。

3章では、1920年代の「社会の発見」という言説空間の変容、マルクス主義と浄土真宗との関係に注目し、マルクス主義による社会批判に真宗大谷派がどのように応答し、教義や実践を規定したのかを論じた。真宗大谷派は、1921年に社会課を設置するなど、社会矛盾に対して組織的な対応を図った。しかし、反宗教運動や「マルクス主義と宗教」論争に代表されるように、真宗大谷派は、マルクス主義の批判の対象となり、自己規定の見直しを迫られる。

長谷川如是閑や服部之総の議論からわかるように、マルクス主義的宗教批判によって批判されたのは、民衆を搾取する行政組織としての教団制度の問題であった。真宗大谷派では、反宗教運動やマルクス主義との応答を通じて、教団の見直しと「内奥」に訴えかけるという二つの次元での反省を見出し、宗教の意味を再定義していく。1920年代の「社会の発見」、マルクス主義的宗教批判は、教団組織の搾取構造を教団内外に意識させ、見直しを要求するものであったと同時に、社会の問題を自己の問題として反省・体験し、信仰を獲得・確立する体験主義的な宗教理解が教団内で強まっていく契機であった。

4章では、改革派が教団組織の中核へ動員される過程を分析するため、総力戦における教団組織改革と教学の再編成の関係に注目した。暁烏敏、金子大栄、曾我量深ら清沢の思想的影響を受けた近代教学者たちは、戦前には「異端」扱いされていた。「異端」であった近代教学者は、総力戦体制に合わせた度重なる組織改革と同時に、教団中核へと動員された。

暁烏は、明治末から大正期の時代背景が作用して、日本主義的言説へと接近し、戦争に協力的な言説を展開した。金子と曾我は、近代的な学問体系を摂取していたこともあり、伝統的な研究者からは異端扱いされ、教団の中核から外されていた。真宗大谷派では、総力戦体

制下における組織改革の要求、真宗に寄せられた真宗の教義と国体との矛盾の疑いを背景に、教学に関する研究機関の整備が急激に進められる。ここで動員されたのが、「異端」扱いされていた暁烏、金子、曾我であり、彼らは改革の象徴として動員される。戦時中に整備された人的資源、制度的資源は、戦後の改革運動へと受け継がれていく。

5章では、真宗大谷派の改革運動である同朋会運動の前身である「真人社」の活動に注目し、信仰と組織の矛盾が戦後日本の封建遺制論に基づく宗教批判によって顕在化し、戦後の教団改革運動を推進したことを明らかにした。

敗戦後から1950年代にかけての封建遺制論が盛り上がった時期には、真宗教団の制度・構造に対して社会科学が批判的な関心を強く寄せた。真人社は、マルクス主義と宗教の緊張関係に対応するため、組織された。真人社は、清沢の思想的影響を受けた改革派を中心に組織されたが、教団の伝統的立場から異端扱いされたこともあり、教団からみれば、在野として活動した。真人社の理念を主導した安田の教学は、実存主義的な宗教観に基づくものであった。真人社の間では、個々の信仰確立に基づく「体験主義」の限界が認識され、安田により教学に基づく教団論の構想が提唱され、教団外部からの改革が構想された。信仰共同体と既存の教団組織との矛盾が認識され、真人社の理念は、同朋会運動という行政運動へと受け継がれる。

6章では、1962年に行政主導で開始された同朋会運動を取り上げ、教団の異端に位置していた近代教学の影響を受けた改革派が、戦時中に形成された人的資源や制度的資源を活用して教団の改革を進めていく過程で生じた問題を扱った。

新興宗教が「大衆」を中心に教線を拡大していく一方、既成仏教教団は、伝統的な基盤であった農村部から都市部への人口流出もあり、既存の布教・教化体制を改革する必要に迫られた。教学者の中には、安田のように、政治への関わりを警戒する者もいたものの、同朋会運動は、清沢の思想的影響を受けた訓覇信雄ら行政の指導者を中心に行われた。しかし、改革は、教学者の理念通りに進んだわけではなく、彼らが認識できなかった課題が生じた。近代教学者・改革派は、教団内部でもエリート層であった。彼らの教学の難解さは、教学と現場の乖離を招く一因となった。改革派は、宗教社会学者の高木宏夫の実態調査も活用しながら、教団体制の見直しを進めた。しかし、改革派が理念とした「個の自覚の宗教」は、既存の体制、法主の体制に対する異議申し立てを意味することとなる。

7章では、1981年に教団の最高規範である『宗憲』の改正に至る過程を分析することで、改革運動が教団体制にもたらした帰結を示した。

『宗憲』改正の直接的なきっかけは、1969年の「開申事件」をめぐって、信仰の近代化の点から潜在的に抱えていた改革派と伝統派との対立の顕在化である。問題の焦点は、真宗大谷派の代表役員の地位を法主が兼務すべきか否か、聖なる地位にあるものが俗務を担うべきかであった。

伝統派と改革派という区分は、伝統宗学とそれに対する異議申し立てとして現れた近代教学という教学上の違いと一致していたこともあり、信仰の近代化と組織の近代化で生じたコンフリクトをいかに調整すべきかが課題となる。ここで決定的な役割を果たしたのは、法学による調整であった。『宗憲』改正に法学的な立場から関わったのは、法社会学者・川島武宜であった。川島の主張では、教団の代表役員の法的地位は俗務とされた。ここには、宗教と世俗を分離するという政教分離、民主主義のロジックが見出される。1920年代から

生じた教団に対する封建遺制批判が、近代教学と法学による根拠づけによって解消された。

8章では、分析結果をもとに、改革運動後の真宗大谷派が抱えている課題として、(1) 生活と乖離する宗教、(2) 合理化する宗教の正統化、(3) 教学者と戦争をめぐる問題の三つを指摘した。さらに、制度的環境と組織、教学との関係に注目した本研究の分析枠組みの発展可能性を示し、現在の浄土真宗が置かれた状況、現在の宗教が抱える対立・矛盾を説明することに今後の課題があると述べた。